

## 〈書評〉

### 挫折から栄光へ

——今西幹一他著『桐の花／酒ほがひ』より——

松本寧至

日本文学の主流は和歌である。いまは果たしてどうかはともかくとして、永いあいだ主流でありつづけ、今後も底流にあり続けるだろう。ある啓蒙学者によって「第二芸術論」が提唱され、安易な伝統は批判された。日本的なものにすっかり自信を喪失した戦後の日本人は、自己卑下も手伝ってまともな反論もなかった。そうかといつてその論が衝撃的だった割に継承はされなかった。あえていえば、短詩型文学を質的というより、量的に軽んじる風潮が続いたぐらいだと思う。日本にはまだ物がなかったから。

もっと衝撃的で影響力をもったのは正岡子規の『歌よみに与ふる書』である。その「再び」に、「貫之は下手な歌よみにて『古今集』はくだらぬ集に有之候。」「去年とやいはん今年とやいはん」とはあきれ返ったもので、合いの子を日本人とや申さん、外国人とや申さんといっているようなもので、しやれにもならぬつまらぬ歌に候、といっている。世間にこつちを向かせるには、このくらい乱暴な調子でないと通じない。『古今集』をほめて言はば、つまらぬ歌ながら万葉以外に一風を成したる処は取得にて、如何なる者にてても始めての者は珍しく覚え申候。」語るに落ちるの感があるが、その真似を

十年二十年ならともかく二百年も三百年もやっている不見識には驚く外はない、と。貫之も歌らしいのは一首もないが、「貫之は始めて簡様な事を申候者にて古人の糟糠にては無之候。」としている。子規は『古今集』『紀貫之』だけでなく、その亜流を痛罵していると見た方がよい。貫之も『古今集』『大井河行幸和歌序』『土佐日記』など、時にあってヒットし、後世への途を啓いた。その点、近代の子規そっくりだ。貫之が子規と問答したら、そういうけれど、「……藤の花房みじかければ畳の上にとどかざりけり」など、当り前じやないか、莫迦か、お前は!。「鶏頭の十四五本もありぬべし」。だから、どうだというのだ、「とく破りてん」と嗤ったかも知れない。それでも進歩的国文学者たちによって、『古今集』を除いた『日本文学の古典』などという本も出たことがある。偏頗は進歩に似ている。

そういうところから見ると、明治書院の「和歌文学大系」三〇巻は、『万葉集』から近代短歌までをつないだ文字通りの大系で、古典、近代などと分けられないのがよい。これは第一期で、続刊を期待したい。まだまだ画期的作品はある。折々の新運動も歴史の山脈のなかに、それぞれの風景となっておさまって行くだろう。

北原白秋は、象徴的、耽美的、官能的、頹廢的、等々、すぐれた才能を発揮した総合的天才である。それは詩に、短歌に、童謡に、小唄になど、多方面に遺憾なく示された。私どもが知ったのは「からたちの花」「揺籃の歌」「この道」「からまつ」などで、なかにはこれも白秋だったのかというようなもので、われわれの郷愁と共にある。驚くべき『邪宗門』の詩人として知ったのはかなり後である。

さて、『桐の花』は白秋第一歌集で、大正二年一月、東雲堂書店よ

り刊行された。二十七歳。

本大系の著者（以下、まぎらわしいのをおそれて校注者とする）は、本学教授で副学長の激職にあり、大学経営や学生指導に繁忙をきわめながら、行き届いた校注を示して、『桐の花』も楽に読むことが出来るのが有難い。初出との校異、語釈、通釈、限られた脚注形式のなかに論説も加えて、これさえあれば、の感を抱かせる。ついでにいうと、

葦崎の白きペンキの駅標に薄日のしみて光るさみしさ

の白秋ゆかりの地より、博士は御通勤である。

さて『桐の花』そのものは、八の歌章、六の詩文章からなり、歌は四四九首。うち「哀傷篇」一〇五首を含む。題名は「桐の花の淡紫色とその曖昧のある新しい黄色さとがよく調和して、晩春と初夏とのやはらかい氣息のアレンジメント」というあたりだろうが、二十五、六歳の Tonka John（大きな坊や）は刊行までに予想もしない晩春と初夏の試練にあう。それはまたあとで触れる。

短歌は、一箇の小さい緑の古宝玉である。古い悲哀時代のセンチメントの精である。<sup>エッセンス</sup>古いけれども棄てがたい、その完成した美しい形は東洋人の二千年のさまざまな追憶に依てたとへがたない悲しい光沢をつけられている。（「桐の花とカステラ」）

第一歌集刊行の息込みが覗える。「緑の古宝玉」はエメラルドだと校注者はいう。

春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと外の面の草に日の入る夕  
「銀笛哀慕調」の一番歌。「鳴こうとする春の鳥よ。どうか鳴いて

くれるな。戸外の草原の向こうにあかあかと日が沈もうとする夕べは、それだけでなくとも感傷を掻き立てるのに。」と校注者はしるす。感傷が一面にみなぎってむしろ壮大な寂しさである。私は『伊勢物語』（十二）の、

武蔵野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれりをふと連想する。元来春の野焼きの歌だが物語では駈け落ちの女が連れもどされる歌で、「哀慕調」でなくもない。

南風モウパッサンがをみな子のふくら脛吹くよき愁吹く

官能的着眼がすごい。校注者は「南からの暖かい夏風がフランスの作家モーパッサンが描く小説のなかの若く美しい女性のふくら脛を吹き、その美しい愁い顔を吹いてゆく。」伝統的季節感を超脱したところに一首の面目がある、と。女の美しさはここだといっているかのである。地下鉄から吹き上げて来る風でスカートがひるがえるマリリン・モンローのしぐさと表情を思い合わせることも出来る。

南風薔薇ゆすれりあることなく斑猫飛びて死ぬる夕ぐれ

斬新で力強い象徴的な歌。斑猫は人まねきともいうとある。道おしえ、とも、道しるべともいう。死ぬるは夕暮に消える薄気味悪さをいう、とする。「薔薇ゆれて」で官能的。斑猫……死ぬる」で、黄昏のなかに行き先を見失った当惑、倦怠感が出ている。格調の高さが美をきわだたせる。

ただ飛び跳ね踊れ踊子現身の杳のつまさき春暮れむとす

「薄明の時」「踊子」。「現身」は斎藤茂吉の慣用語と校注者は指摘する。第五句「春暮れむとす」で、無心に踊り狂う踊子の若さは杳のつまさきで、春という舞台の終焉に立っている。潑刺のうちにも、

はやくもしのびよる頽唐。歡樂と哀愁。

くろんぼが泣かむばかりに飛び跳ねる尻ふり踊にしくものはなし

「黒人ダンサーが泣き出しそうな表情をして飛び跳ねる尻ふりダンスほど、滑稽この上及ぶものはない」と。然り。傍目には滑稽極まりないが、「泣かむばかりに」は一種の神憑りの狂躁状態であるべく、ここにも白秋の官能的目なざしを見るのである。

恋すてふ浅き浮名もかにかくに立てばなつかし白芥子の花

古歌を踏んでいるこというまでもないが、男としては浮名の一つも立つのは悪くないと。「白芥子の花」ときめるところ、清艶である。そんな女性の倅か。恋を恋して、プレイ・ボーイを気どる、トンカ・ジョン自身の心象か。

黒き猫夜は狂ほしかきいだき五月蠅きものに昼は跳ねやる

「雨のあとさき」の章。黒猫はポーの小説以来の心底の魔性の象徴だと校注者はいう。それ以上解釈無用の歌だが、この前後の歌とともにすこぶる濃厚である。

「哀傷篇」は「哀傷篇序歌」「哀傷篇」「続哀傷篇」「哀傷終篇」の四章からなり、「白猫」「ふさぎの虫」の小品詩文を収める。

ここは校注者の脚注ではば輪郭がわかる。「人妻・松下俊子と白秋が情を通じた結果、それを知った夫・松下長平の姦通罪による訴訟により市ヶ谷の未決監に収容された下獄事件を背景として成立する。白秋が俊子と知り合ったのは、明治四三年九月。千駄谷（原宿）に引越し、垣根越しに話のできる隣家の主婦が俊子であった。白秋

の側から言えば、俊子の美貌と人妻としての不遇への同情、そしてパンの会会員との交遊を通しての頽唐享樂の雰囲気にとっぷりと浸っておったこと等により、俊子の側から言えば、国民的詩人白秋への憧憬、やがて夫から妻妾同居を迫られる夫との間の齟齬による精神的肉体的空虚感を埋め合わせようとするところから、二人の心は寄り合い、進展したものであった。「明治四五年七月五日、俊子の夫の告訴により、翌六日には白秋は俊子と共に未決監に収容された。予審等が重ねられるなかで弟鉄雄の奔走尽力により示談が成立、四月二〇日に保釈、八月一〇日無罪免訴となった。」

「この経験が白秋に相應の打撃を与えたことは言うまでもないが、その詩風、歌風の上にも大きな変化をもたらしている。」

『桐の花』の文芸境地は、『哀傷篇』に至って痛切な下獄体験と自己省察によって、沈痛深切の境に達し、その世界に変貌を見せ、後の白秋文芸の形成進展に影響をもたらす。『哀傷篇』あらずしても、『桐の花』の浪漫耽美の世界は確固としたものとして史的位置を占め得たろうが、『哀傷篇』なくしては『桐の花』の真面目の一面の欠如は否めない。」と。

長い引用になったが、複雑な事件の経緯をよく説明して、以下の歌文を理解するに大いに役立つ。歌はほとんど紹介するだけで経過もわかる。折々脚注を参考にするだけでよい。

あだこころ君をたのみて身を滅す媚薬の風に吹かれぬるかな  
われら終に紅きダリヤを喰ひつくす虫の群かと涙ながすも

悲しき日苦しき日七月六日

鳴きはれて逃ぐるすべさへ知らぬ鳥その鳥のごと捕へられにけ

り

かなしきは人間のみち牢獄みち馬車の軋みてゆく磔道

しみじみと涙して入る君とわれ監獄の庭の爪紅の花

「爪紅」は鳳仙花。

この心いよよはだかとなりにつけり涙ながるる涙ながるる

注を要約すると、囚人というこの上ない恥辱の身となり、世にあったときの自恃や虚飾がみなはがされる。そういう自己と向きあったとき、いいしれぬ悔恨にくれるばかり。

恐ろしくおのれ死なむとつきつめぬいききとまたも赤子啼き啼く

出産した女囚があったのである。対照の妙。

裁判の日、七月十六日

鳩よ鳩よをかしからずや囚人の「三八七」が涙ながせる

「三八七」は白秋の囚人番号。正月と盆の十六日は地獄の釜の蓋も開くという日なのに、閻魔の庁そのもの、裁判にかけられるとは。

監獄いでてじつと顫へて噛む林檎林檎さくさく身に染みわたるくれなるの濃きが別れとなりにつけり監獄の花爪紅の花

右二首は釈放された感激を詠んだうち。「哀傷終篇」には、「旧歛とどめがたし生はかたく死はやすし」と詞書して、悔恨を詠う。

ひなげしのあかき五月にせめてわれ君刺し殺し死ぬるべかりき

小品「白猫」には、

たとへ無罪になったにせよ、かりにも人妻と牢獄に堕ちた私、背徳者——私は深い心に泣き乍ら幻想の燈かげに弱ったからだ身体を労つてゆく、潤った霧がそこにもここにも重い層をなし

て私の身辺を圧へつける。……。

怖々と人目を忍んで歩るいてゆく切りつめた今の自分の心にも何時しか忘れはてた淫蕩な罪の記憶が泣かむばかりに芽ざしてくる浅間しさ。

などと心境を述べている。「ふさぎの虫」になると、もっと錯乱寸前で鬼気迫る。懊惱の白秋がある。

一生の恋だ、命がけの愛だの信実だのと云った蜜の如ないつかの抱擁も千言万句の誓ひも歓語も、但しは狂ひに狂った欲念の焰も、ただ一息に押しこかしてゆく「時」の力の前には何等の矜持も權威もあつたものではない。時は過ぎてゆく。而して凡てが何時とはなく伝奇的な美しい幻想の色彩の中に掻き消されて了ふ。……。

も一度逢ひ度い……ハッとして目を開けた、嘲笑ふやうに鶏頭が光る。

ほんとにあの鶏頭のやうな女だつた、お跳さんで嘔吐きで伶俐で愚かで虚栄坊で気狂で而して恐ろしい悪魔のやうな魅力と美しい姿……凡てが俺の芸術欲を噓かし瞞らかし、引きずり廻すには充分の不可思議性を秘して居た、……而して遂ひには二人とも監獄に堕ちて了つた……。

どうしてあんなに夢中になったか自問し、

只俺の芸術至上主義が俺自身を妖艶な靈感と幻惑の世界に昏睡させて了つたのだ、罪悪がそこで醸された、つくづく俺は俺の魔法の空恐ろしさを知つた、そして女の美しさを、……。

そのあとどちらが悪者だったのか、適当にあつたっておけばよ

かったなどといわれるが、二人とも墮つべくして、的確に墮ちたのだといっている。

書評の筈であるのに、白秋論めいた文章になったようである。素人の私の論の当否は別として、注釈書は元来、その助けをかりながら、当該作品を論じるためにあるのだと思う。だから、それがスムーズに行なわれれば、注釈書の成功ということだろう。

さて「哀傷篇」であるが、これがなくとも白秋の世界は確固たるものとなつたろうが、これある故に、白秋のその後の文芸形成に大きな影響を及ぼしたというのは肯ける。

『桐の花』出版計画は、この事件発生以前から進められていたもので、その途上に突如としてこの事件に遭遇した。そこで得た歌什が一〇五首、それに「白猫」「ふさぎの虫」の小品。すでに名声を得ていた白秋に下獄はこたえた。その間の歌の発表も『桐の花』入集も迷つたであろう。そのすえ、収録を決めたのは、選択というよりも賭であり、懺悔告白により再生をはかったのであろう。臨終にも「新生だ」といったそうである。

大成した後年の白秋像から見れば「哀傷篇」はない方がよいかも知れない。全集一六巻、あるいは第一期二四巻、第二期一六巻という偉業から逆照射すれば、どうでもよいことともいえよう。だが名声噴々の天才とはいえ、まだ未来を知り得ない二十六、七歳の青年である。その現在の判断では収録せずにはいられなかつたろう。「集のをはりに」でいっている。

わが世は凡て汚されたり、わが夢は凡て滅びむとす。わがわ  
かき日も哀楽も遂には皐月の薄紫の桐の花の如く消えはつべ

き。……

囚人 Tonka John は既に傷きたる旅人なり。

この集世に出づる日ありとも何かせむ。慰めがたき巡礼のそのゆく道のはるけさよ。

このあと巡礼詩社を興し、「地上巡礼」を出す。模索はつづく。自分探しはつづく。その時に立ち返れば、「哀傷篇」の相半ばするといふ毀誉褒貶の評価も定まることだろう。「ふさぎの虫」は異版から自身によって削除された。それは迷いが吹切れたからで、私は削除したことに収録時の気持ち同様の重さを感じる。

とにかく白秋は、こともあろうに七月十六日に地獄を見た。この異常体験こそそのちの偉業を約束するものだった。実家が倒産したように、よくもこの才能はつぶれなかつた。万人に慰撫と郷愁を与えて止まない小唄や童謡も、懺悔告白と浄化された才能から生まれたのであろう。人生の辛酸をなめ尽した者にして、はじめて本当の喜劇が書けるというように。

「白秋は松下俊子と結婚し、後に破綻に至るが、本校注者としては、そこまで筆を及ぼす要は認めない。」その通り。トンカ・ジョンの『桐の花』がおのずから解答を与えているからである。

私は本稿を執筆して、はじめて白秋の核心を垣間見たような気がする。だが、「この道はいつか来た道」——前にもどこかで見ていたような懐しさもおぼえるのである。

なお本書は『酒はがひ』（吉井勇）とセットで、校注は鷺只雄氏であるが、言及出来なかつた。

（A5版、四四七頁。内『桐の花』二四二頁他。平成一〇年四月刊）